小学校５年における学級力向上プロジェクトの開発と評価
～教科横断的なカリキュラム編成を通して～

蛯　谷　み　さ・田　中　博　之

１．問題意識

学級力向上プロジェクトは，田中（2013a 及び 2014）が提案する新しい学級づくりの手法であり，学級力アンケートの結果をレーダーチャートで可視化し，それを用いて子どもたちが学級の状況を診断し，さらに学級改善のための主体的な取り組みを行うプロジェクト学習である。

この５年ほどの間に，新潟大学附属新潟小学校（2010 及び 2012）では，学級力向上プロジェクトの多くの実践事例を公開するとともに，実践に関する経験知を蓄積してきた。また，竹本（2010）によるサークルタイムの効果検証ツールとして学級力レーダーチャートを活用する試みや，学級力向上プロジェクトの効果を上げるためのツールとして，はがき新聞の活用方法に関する実践事例が蓄積されている（蛯谷，2013a・2014 及び彦田，2014）[1]。

しかし，筆者らは，学級力向上プロジェクトの効果を上げるためには，その中心的な実施領域である特別活動での話し合いや学級活動だけでなく，教科横断的なカリキュラム編成を行うことにより，国語科や道徳，総合的な学習の時間までを包括的に関連づける大単元を，年間を通して実施することが必要であるという仮説を提案してきた（田中，2013b）。

なぜならば，子どもたちが主体的な活動を通して自らの学級をよりよくしていくためには，仲間づくりアクティビティーを単発的・羅列的に実施するよりも，子どもたちが年間を通して，学級をよりよくしたいという目的意識と追求意欲をもって，教科横断的な学習活動に取り組むことが必要だからである。例えば，学級改善の方法を提案する話し合い活動（国語科），友だちのあり方について主体的・協同的に考え，実践的な行動指針を決定する活動（道徳），学級力向上プロジェクトの進捗状況や成果と課題をはがき新聞に書くことを通してプロジェクトの改善を継続していく活動（特別活動），さらに，学級力向上プロジェクトや学級改善の具体的な取り組み例を発信していく活動（総合的な学習の時間）などを，教科横断的に関連づけることが求められる。

しかしながら，そのような学級改善のための教科横断的なカリキュラム編成を通した学級力向上プロジェクトの実践事例は，これまでに森嵜（2013）によるものしか報告されていない。したがって，その先進的な実践事例と異なる学年で可能であるのか，また，異なる教科内容をもつ単元で実践化が可能であるのか，また，それぞれの教科や領域で何時間ずつの小単元が設定可能なのかについて，経

験知さえ蓄積されていないのが現状である。

そこで，本研究では，学級力向上のための教科横断的なカリキュラム編成を通した学級力向上プロジェクトの開発を，小学校5年生を対象学年として事例研究によって実施し，そのモデルの検証を学級力レーダーチャートの変容と子どもが書いたはがき新聞の質的分析を通して行うことをねらいとする。

2．実践研究の目的と方法

以上のような問題意識に基づき，本研究は，カリキュラム開発に基づいた授業開発を行う実践研究である。具体的には，学級力向上プロジェクトの実践方法を援用して，これまでにほとんど先行事例のない，教科横断的なカリキュラム編成，つまり学級力向上カリキュラムに基づいた学級力向上プロジェクトのあり方に関する実践的な知見を整理することをねらいとし，以下のように研究目的を定める。

（研究目的）

本実践研究は，教科横断的な学級力向上カリキュラムとそれに基づく学級力向上プロジェクトの開発を，小学校5年生を対象学年として事例研究によって実施し，その検証を学級力レーダーチャートの変容と子どもが書いたはがき新聞の質的分析を通して行うことをねらいとする。

（研究方法）

本実践研究の方法は，アクションリサーチとしての実践研究である。具体的には，先行研究に基づいてカリキュラムと授業のモデルを開発し，それに従って事例研究として授業を実施して，その成果を実証的に検証する。ただし，成果の検証においては，質的分析を中心として，学級力レーダーチャートの変容と子どもが書いたはがき新聞の内容分析を行う。

本実践研究で開発したカリキュラムと授業を実践する対象校は，大阪府内の公立A小学校である。小学校5年生の1学級において事例研究を実施する。なお，本論文の執筆者の一人である，対象学級の学級担任の教職経験年数は，28年である。本実践研究は，2012年度に実施した。また，年度内に学級力アンケートを6回実施し，はがき新聞は8回にわたり5種類のカテゴリーに属するものを書かせた。

本実践研究においては，執筆者のうち，田中が理論構築（カリキュラムとプロジェクト学習のモデル開発）を行い，蛯谷が研究授業の開発と実施を担当した。本論文は，蛯谷が全体を執筆し，田中が修正をして全体をまとめたものである。

3．先行研究の概観

では次に，本研究で援用する学級力向上プロジェクトの考え方とシステムを簡潔に概観し，その学習モデルを発展させて，どのような教科横断的なカリキュラム編成を行うかについて，その特徴を述べる。

(1) 学級力とは

学級力とは，田中（2013a）によれば，「学び合う仲間としての学級をよりよくするために，子どもたちが常に支え合って目標にチャレンジし，友だちとの豊かな対話を創造して，規律を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を創り出そうとする力」である（p. 4）。

このような定義を受けて，よいクラスといえる状況を表す学級力には，次のような５つの下位能力と学級の具体的な姿が含まれている（田中，2013a，pp. 4–5）。

領域１　目標をやりとげる力（目標，改善，役割）
領域２　話をつなげる力（聞く姿勢，つながり，積極性）
領域３　友だちを支える力（支え合い，仲直り，感謝）
領域４　安心を生み出す力（認め合い，尊重，仲間）
領域５　きまりを守る力（学習，生活，校外）

このような５つの力をもつ学級力と関わって，学級力向上プロジェクトのシステムにおいては，子どもたちに学級状況を可視化するためのツールとして，学級力アンケートを作成している（資料１田中，2013a，pp. 19–22。

(2) 可視化手法としての学級力アンケートと学級力レーダーチャートの特徴

では次に，学級力アンケートとその結果を可視化するための学級力レーダーチャートについて説明する。

学級力アンケートは，学級力の状況を子どもたちが診断するためのデータをとる，子ども向けのアンケートである。これによって，子どもたちは自分たちのクラスの実態を，自分たちの評価結果として実感をもって受け止め，自分たちで主体的に診断し，それに基づいた学級改善の取り組みを始めることができるようになる。学級力アンケートは，それぞれ小学校中学年版，小学校高学年版，中学校版の３種類からなっているので，本実践研究では，小学校高学年版（５領域 15 項目）を用いることにする。

次に，学級力を向上させるには，学級の子どもたちが納得し，そこから目標と手だてを見いだすことができる，わかりやすい客観的な指標やデータが必要になる。そこで，学級力レーダーチャートを作成するための表計算ソフト（Microsoft 社の Excel）を用いたデータ集計プログラムが開発されているので，本実践研究で活用する（田中，2013a）。

(3) スマイルタイムの意義と進め方

さらに，学級力レーダーチャートを用いて，子どもたちが自分たちのクラスの学級力の自己診断をする時間であるスマイルタイムについて説明する。

スマイルタイムとは，学級力アンケートの結果をレーダーチャートで図示して，それを見ながら教師と子どもが共に「わがクラス」の仲間づくりの成果と課題を話し合い，さらにこれからの学級力向

上の取り組みのアイデアを出し合う，子ども会議のことである（田中，2013a，p. 19）。

その教育目的は，学級づくりのための話し合い活動にクラスの子どもたち全員を参画させ，客観的なデータをもとにして，子ども主体の学級づくりを授業として成立させること，そして，そのことを通して，学級力を意図的・計画的に向上させることである。

通常は，スマイルタイムを年間に５回程度実施して，子どもたちの主体的な学級状況の診断と改善を行うことが経験的に有効であると，田中（2013a）は指摘している（p. 19）。

(4) 学級力向上プロジェクトとは

では，学級力向上プロジェクトの進め方について概観する。

学級力向上プロジェクトは，学級力を向上させるために，子どもたち自身が学級力アンケートを実施してクラスの実態を客観的にとらえ，その診断結果を基にしてクラス全員で学級力向上のための取り組みを実践しようというプロジェクト学習である（田中，2013a，p. 12）。

いいかえるなら，学級力向上プロジェクトとは，学級力アンケートによる学級力の自己評価，学級力レーダーチャートを基にして話し合うスマイルタイム，そして学級力向上のために子どもたちが主体的に取り組むスマイル・アクションという３つの活動を，１年間の R-PDCA サイクルに沿って意図的・計画的に実践する協同的な問題解決学習である。

(5) 学級経営カリキュラムの必要性と特徴

最後に，学級経営のための教科横断的なカリキュラム編成の必要性と編成指針について概観する。

これまでの学級経営の計画性に関わる学校での慣習は，年度当初に学級担任が概略的な学級経営案を書くことである。しかしながら，その中には，年間を通した学級における人間関係づくりの活動計画や，教科・領域などを総合的に組み入れた計画的な指導方針が明記されていることは少ない。

そこで，教科横断的な学級力向上カリキュラムを編成することによって，よりきめ細かく学級の実態に応じた効果的な取り組みの全体計画を構想し，学校カリキュラムの全体を通して意図的・計画的に学級づくりを実践することが大切である。

具体的には，先行研究として次の５点が教科横断的な学級力向上カリキュラムの特徴として指摘されている（田中，2013b，p. 216）。

【学級力向上カリキュラムの５つの特徴】

①教科横断的なカリキュラムとして作成し，教科，道徳，特別活動，総合的な学習の時間，朝の会・帰りの会などのそれぞれの特性を活かした学級づくりの取り組みを含める。

②年間を通して核となる学級づくりの場面として，数回のスマイルタイムを特別活動や総合的な学習の時間に位置づけ，その中で学級目標の設定，学級力の診断・評価，取り組み（スマイル・アクション）のアイデアの考案，取り組みの評価・改善等を行うようにする。

③特に教科指導においては，グループ学習による協力や話し合い活動の充実（全教科），相互評価を通した認め合いの活動の活性化（全教科），学級力向上の取り組みについて書いたり話し合ったりする活用学習の設定（国語科），学級力アンケートの結果をグラフにして組み入れた新聞づくり（算数・数学科），学級の絆や仲間をテーマにした学級旗や学級エンブレムの作成（図工科・美術科），クラスソングやテーマソングの作詞・作曲（音楽科）等の多様な取り組みを含めるようにする。

④総合的な学習の時間においては，R-PDCAサイクルに沿ったスマイルタイムの設定，評価セッションや成長発表会の設定，プロジェクトの成果を祝う会の設定とその中での学級力の成長の振り返り，多様なワークショップによる身体と言葉を用いた仲間づくり活動等を実施するようにする。

⑤特に国語科の教科書単元に位置づけた活用学習のあり方を工夫し，例えば，「随筆を書こう（6年）」，「活動報告書を書こう（5年）」，「改善案を提案しよう（5年）」，「学級会を開こう（5年）」，「新聞を作ろう（4年）」，「グラフや表を使ってポスター発表をしよう（4年）」，「調べたことを書こう（3年）」というような活用単元で，学級力を題材として文章を書かせたり，話し合わせたりすることを通して，学級力向上の意識づけを図るとともにその成果と課題について自覚的に振り返ることができるような活動計画を行う。

以上概観したような学級力向上プロジェクトのシステム要件に準じて，本実践研究を行う。

４．開発した学級力向上のための教科横断的なカリキュラムの特徴

では，先行研究の知見を援用しながら，本実践研究で開発した教科横断的な学級力向上カリキュラムのモデルの特徴を次に説明する。

(1) 開発した教科横断的なカリキュラムの特徴

本実践研究で開発した，学級力向上のための教科横断的なカリキュラムの構想（カリキュラム・プラン）は，次の３点を特徴とする。なお，本実践研究の対象校では，国語科の教科書は東京書籍のものを使用した。

①関連づける教科・領域は，国語，特別活動，道徳，総合的な学習の時間とする。

【国　　語】書いたり話したり聞いたりする活動を通して，友だちのよさを認め合う（10時間）

【特別活動】はがき新聞を書いて学級力向上に関わる決意や責任を明らかにする（6時間）
スマイルタイムを行う（6時間）

【道　　徳】学級力に関わる学級道徳の価値や必要性に気づく（5時間）

【総合的な学習の時間】学級力向上の取り組みを行う（10時間）

②1年間を通して，各学期に教科横断的なカリキュラム編成を行う。

③各教科・領域におけるいくつかの単元の内容は，習得と活用とに分けて相互関連を図る。

(2) 教科横断的なカリキュラム編成における学級力向上プロジェクトの位置付け

先行研究を援用して説明すると，上記のカリキュラム・プランの中で，スマイルタイムは，学級力アンケートの結果に基づいた，学級状況の診断，学級改善のための計画づくり，学級状況の再診断，というプロセスの各段階に当たり，それぞれがR－PDCAサイクルのR，P，Cにあてはまる。これらは，特別活動において実施する。そして，D（計画案の実施）とA（改善案の実施）の段階は，上記のカリキュラム・プランで示されたそれぞれの単元で行う活動，つまりスマイル・アクションに相当する。これらは，特別活動の学校行事及び総合的な学習の時間で実施する。

なお，カリキュラム・プランに含まれる国語と道徳における学習は，学級力向上プロジェクトそのものではなく，それを支える言語活動の充実と道徳的実践力の育成のために行われるものである。

(3) 想定される課題

このようなカリキュラム・プランを構想することにより，それぞれの教科・領域に含まれる多数の単元の相乗効果を通して，学級力向上プロジェクトの教育効果を高められることが予想される反面で，次のような２点での課題も想定される。

一つ目は，学級力向上プロジェクトが本来的に仮定している子どもの主体性の発現という原則が，十分に守られないという懸念があることである。なぜなら，ここで構想した教科横断的なカリキュラム編成のあり方を，学級の子どもたちがスマイルタイムで自主的・自発的に構想・提案することは考えにくいからである。

二つ目の懸念される課題は，ここで構想した教科横断的なカリキュラムに含まれるすべての単元を年度当初に構想し尽くすことはできないため，構想案としてのカリキュラム・プランと実際に実施されたカリキュラムが異なってくる可能性があることである。いいかえれば，本実践研究で行おうとしているカリキュラム開発は，年度当初の構想案（計画カリキュラム）と実践を進めながら具体化したカリキュラム（実践カリキュラム）とを組み合わせながら行う，漸進的カリキュラム編成法である（田中，2013b）。

これらの点に十分留意しながら，慎重な研究成果の考察を後段で行いたい。

５．授業開発の実際　１学期の実践

それではここから，開発した教科横断的なカリキュラムに沿って実施した学級力向上プロジェクトに関わる授業の実際を報告する。

(1) 授業の実際

学級力向上プロジェクトの１学期の授業について実施順に報告する。

① 国語科単元「メモを使って題材をさがそう」（領域［書くこと］）

学級力向上プロジェクトの実践モデルとしては，まず特別活動の時間に，「いいクラスってどんなクラス？」というテーマで，フィンランド・メソッドでいうところのカルタ（イメージマップやウェビングとも呼ばれる）を用いて，理想とする学級の特徴を全員で協力して作る活動が位置付けられる。しかし，本学級ではカルタを描いた経験がある児童がほとんどいなかったため，急遽カリキュラム・プランにはなかった本単元「メモを使って題材をさがそう」を使ってカルタづくりの練習を行うことにした。

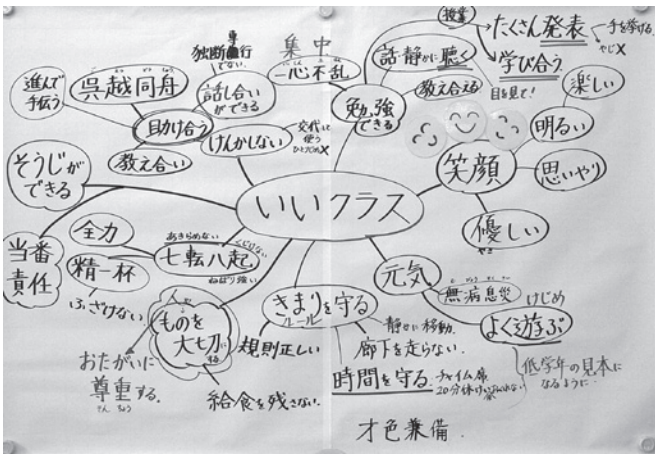
この単元の活動は主に以下の３点であった。

- ある言葉から連想を広げて書く題材を探し，短い文章を書く。カルタを使う。（生活をもとにした短作文）
- ある言葉から，関連するたくさんの言葉を思い浮かべてメモに書いていく手法について学習する。
- カルタに書き出した出来事や経験の中から，文章に書く題材を一つ選び，選んだ題材で文章を書く。

この単元を経ることで，子どもたちはカルタを描いて自分の考えを整理するスキルを身に付けることができた。

② 特別活動単元「スマイルタイム第１回目　いいクラスってどんなクラス？」

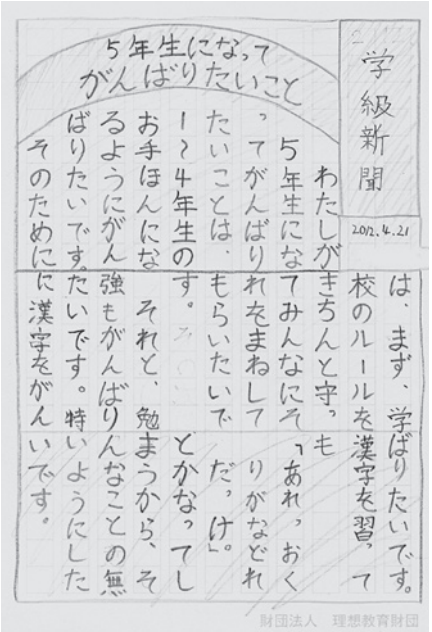
上記①の国語科単元で習得したカルタの手法を特別活動で活用した。学級のスタートにあたって，「いいクラスとはどんなクラスか？」を考えさせ，これから始まる新しいクラスの目標づくりに役立てるためにカルタの手法を活用し，一人一人で理想の学級像を整理してから発表させて，学級全員の考えを取り入れてビッグカルタを作成し教室掲示した（図表1）。



図表１「いいクラス」について連想することを全員で協力してビッグカルタにした

③ 特別活動単元「はがき新聞に５年生の決意を書こう」

そして，「5年生になって」と題して自分の目標やクラスへの願いを「はがき新聞」に短作文として書かせた（図表2）。その上で学級の目標を決め，それに向かって学級全員が進むことにした。



図表２「5年生になって」と題して自分の目標やクラスへの願いを書いたはがき新聞の例

④ 特別活動単元「スマイルタイム第２回目」

また，定期的に，「スマイルタイム」という学級の現状について話し合う時間を設け，特別活動の時間に全員で課題と対策について意見交換をした（写真1）。

そして，自分たちのクラスに足りない力を伸ばすために，どうしたらよいのか意見を出し合い，集約して具体的な対策方法を決めて取り組むことにした（写真2）。

この第２回目のスマイルタイムで，子どもたちは自分たちがつけた学級力アンケートの結果を初めてレーダーチャートにして見た。つまり，本時は学級力レーダーチャートを見ながら学級の状況を子どもたちが主体的に診断し合う初めてのスマイルタイムとして実施した。

写真１にあるレーダーチャートの形状を見てわかるように，本学級では，子どもたちがアンケートを通して評価した通り，１学期の初期において，「学習」，「尊重」，「聞く姿勢」という領域に課題が見られた。その逆に，「認め合い」，「つながり」，「校外」においては比較的良好な結果となっている。そこで，もう少し国語科の単元を通して友だちを尊重したり，友だちの発言を最後まで聞いたりする態度を育てる必要性を強く感じた（詳細な図は，９節の図表10を参照のこと）。

写真１「スマイルタイム」で話し合った学級の課題

写真２「スマイルタイム」で学級力向上の方策について話し合った

⑤ 国語科単元「ゲストティーチャーをすいせんしよう」領域［話すこと・聞くこと］

この教科書単元の目標は，次の２点である。

- 理由を明確にして，人物をすいせんするための話をすること。
- 目的や意図に応じて，事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら，場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。

この教科書教材では，ゲストティーチャーとして招きたい人を選び，理由を明確にして推薦する例が示されており，人物を推薦するときには，その人の持っている技術や知識，これまでの実績や経験，人柄など，「すいせんする理由」と「具体的なエピソード」を話してよさを伝えることを学習した。この学習を通して，学級力の認め合う力につながる，「友だちのよいところを伝える」活動の基礎を身に付けるようにした。

⑥ 国語科活用学習「林間学舎の班長をすいせんして決めよう」（発展的な取扱い）

上記の教科書単元の学習の後，国語科活用学習として，学校行事である林間学舎の班長を推薦することを目的としてこの学習の成果を活用するようにした。理由と具体的エピソードを話すことは，その後のいろいろな場面（例えば，代表委員や運動会の応援団員を推薦するとき等）で活用するようにした。学級力向上との関わりでは，日頃から友達のいいところに関心を向けるように，内容上の工夫をした。

⑦ 国語科単元「意見とその理由を聞き取ろう」領域［話すこと・聞くこと］

この教科書単元の目標は，次の通りである。

- 意見と理由を聞き取ってメモに書き，話し手が意見に対してふさわしい理由を述べているかを考える。

この教科書単元では，意見とその理由を正しく聞き取るために，「意見を正しく理解する」「理由が意見に対してふさわしいかを考える（話題がそれていないか，かたよった見方になっていないか，内容に食い違いはないか）」「自分の意見と比べながら聞く」というポイントを学習する。そのことを通して，学級力における聞く姿勢を育てるようにした。

⑧ 道徳「本当の友だち」

上記の国語科学習⑦で習得した「自分の意見と比べながら聞く」力と国語科単元①「メモを使って題材をさがそう」のカルタの技能を活用させて，「本当の友だち」について考えさせ，意見を出し合う道徳の学習「本当の友だち」を行った（写真３）（写真４）。

子どもたち一人一人が「本当の友だち」とはどんな友だちかについて考え，思うことを付箋紙に書き出していった。それを，小グループでそれぞれの意見を比較して分類した。その後，クラス全体の話し合いで，グループでまとめた意見を出し合い，全員でビッグカルタを作っていった。

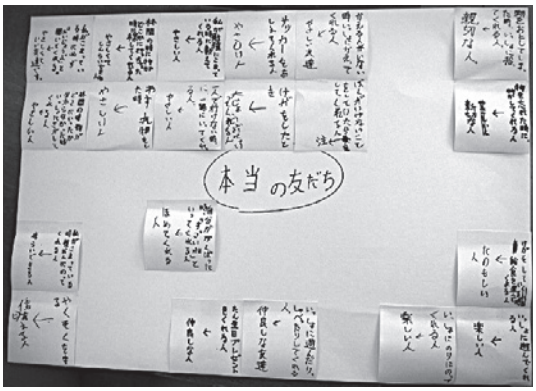


写真３「本当の友だち」について，エピソードを添えてグループで分類した

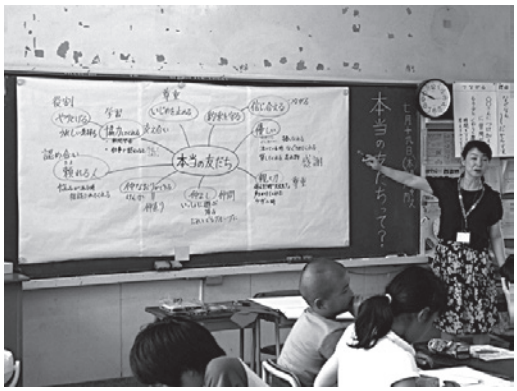


写真４「本当の友だち」について考えたことをカルタで表した

⑨ 総合的な学習の時間単元「めざせ！ 向上！ 学級力！」

この単元の目標は，次の通りである。

- 子ども達が主体的に学級づくりに参加することによって，子ども達の思考を促し，言葉の実践力を育てるとともに，学級の改善を図る。

この単元では，上記国語科単元の①⑤⑦で学習した力と４年生時に国語科で習得した新聞を書く力を活用して，子どもたちによる課題設定，子どもたちによる必要な調査と資料づくり，子どもたちによる振りかえりとA4サイズの学級新聞づくり，子どもたち自らの発信活動と学級改善の取り組みを行った。

具体的には，次のようなことである。

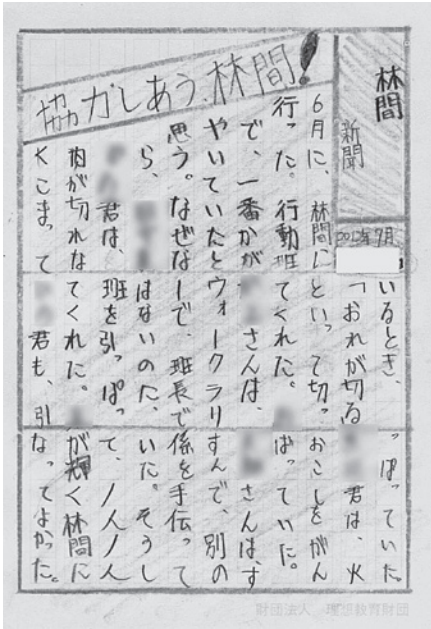
まず，特別活動で実施したスマイルタイムで子どもたちが決めた解決策（スマイル・アクション）を実施するために必要な独自アンケート調査を行い，その結果を新聞形式にまとめて発信することにより成長の足跡とさらなる課題を振り返りながら子ども達自らが学級力の向上のために取り組んだ。この中には，国語科単元①で学習した「カルタ」で考えを広げる手法と国語科単元⑤で学習した「人物のいいところを見つけて理由をつけて話す」内容，さらに国語科単元⑦で学習した「意見とその理由を正しく聞き取り自分の意見と比べる」の学習が活用されている。

⑩ 特別活動単元「はがき新聞を書こう」

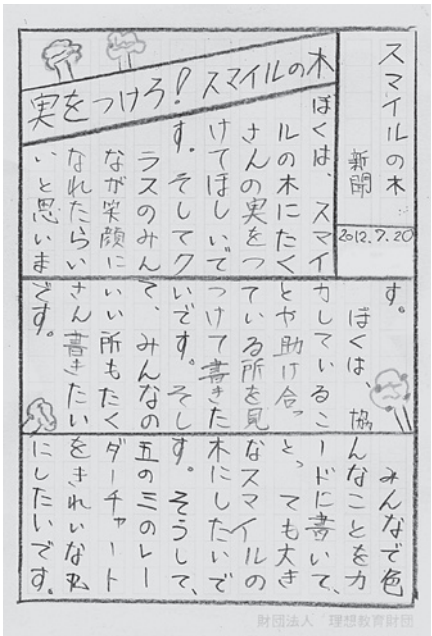
このような授業と並行して，ミニサイズの「はがき新聞」を書いていく取り組みを行った。

１学期に書いたはがき新聞の内容は，①「5年生なって（自分の目標やクラスの目標や願いについて）」（図表２）や②「自然の産物　竹の子に接しての感動」③「音楽鑑賞会の感想」（図表３）④「林間学舎を終えての成長」（図表４）⑤「学級力向上に向けて自分の決意」（図表５）の５つである。

図表３　音楽鑑賞会で初めてお琴を聞いて書いたはがき新聞の例



図表４「林間学舎新聞」林間学舎を終えて成長したことを書いたはがき新聞の例



図表５　学級力向上への自分の決意を書いたはがき新聞の例

(2) １学期の実践についての考察

国語科学習における友だちと協力して聞いたり話したりする力を育てる学習は，集団の思考と協調性を促し，さらに「いいクラス」についての視点を増やし共有する意味で有効であった。また，クラス全員で意見を述べながらカルタを作成していく中で，友だちにわかってもらえるように理由を付けたり，具体例を述べたりして，共通理解を図る言語活動が組み込まれ，より学級の協調性が高まった。さらにその過程では，「なぜなら～からです。」「例えば～です。」という話型を使うようにした。その結果，目指すクラス像が豊かになり，学級全員で協力して作成したビッグカルタを教室に掲示しておくことで，目標をイメージしやすくなるだけでなく，これからのクラスの具体的な指標となった。

道徳の授業「本当の友だち」では，日頃，身近にいる友だちの大切さに気づくきっかけになった。何気なく生活している毎日の中で，どんなふうに助けられたり，支え合ったりしているかを改めて知ることになり，困ったときにどんな言葉かけをするとよいのかなど，場面と言葉づかいの関連やお互いの心をつなぐ言葉の力に気づくことができた。しかし，この授業は，友だち関係を作る実際の自分の行動につなげるための一歩にはなったが，学級全体を見ると，自己中心的な振る舞いによるトラブルはまだ課題であった。

総合的な学習の時間での学習「めざせ！ 向上！ 学級力！」では，学校の中での「家庭」ともいえる自分たちの学級について，自ら課題を見つけ，その問題解決に子ども達自らが対策を考え，話し合うことにより，実際生活の中において日々変化して起こる諸問題に対応して考える実践力を培うことができた。学級における人間関係の状況は，その構成員の一人一人の状況によって日々左右される。したがって学級の課題にクラス全員でアイデアを出し合い，解決の糸口を見つけ，解決していくことは，まさにクラス全員の力が必要であり，そのためにお互いに意見を交換して意思疎通する力を育てることにつながった。

特別活動では，スマイルタイムをすることで，仲間意識を育て，言葉の力を育てることにつながり，話し合うことを嫌がる子どもが少なくなった。その結果，多くの教科の学習で「賛成です」「○○さんに付け加えます」というような「つながり発言」が多くみられるようになった。お互いの頑張りを認めたり励ましたりするなど，お互いがつながるための言葉の力をつけることができたといえる。また，はがき新聞の効果については，次の通りである。はがき新聞は，文字通り手のひらに乗るくらいのはがきサイズのミニ新聞である。したがって，短作文として抵抗がなく書きやすいために，継続することで書く力が付いてきた。また，子どもたちにとって書きやすいために自分たちの日常を即発信でき，学級の様子や個人個人の成長の過程が可視化されるため，学級の現状分析をして成果と課題を把握することで学級力改善の意欲も高まった。また，新聞に書くという，学級改善に向けた責任ある提案をすることで，子どもたちにおいて，学級改善の実行力も生まれやすいという利点があることがわかった。

６．授業開発の実際　２学期の実践

２学期は，学級内で文房具を隠すといういじめが発生したしたこともあり，人と人との関係や互いの気持ちを考え，学級集団の心のつながりを意識させる学習を多く取り入れ，教科横断的なカリキュラム編成のもとで学級力向上プロジェクトを行うことにした。

(1) 授業の実際

① 特別活動単元「夏休みの自由研究」

子どもたちは，一人一人が自由研究した事柄や制作した作品を発表し，その後，友だちからもっとよく知りたいことの質問や感想，アドバイスを受けた。発表を聞いた人は，絶対に何か一言は言うというルールを設けた。こうして各自の夏休みの自由研究の発表会をすることにより，研究の成果を共有すると共に，個人個人のよさを感じることができた。

② 国語科単元「パネル討論をしよう」（領域［話すこと・聞くこと］）及び国語科活用学習「いじめ防止活動」（発展的取扱い）

前者の単元の目標は，次の通りである。

- 自分の立場を明確にして，相手の意図を考えながら話し合う。

後者の単元の目標は，次の通りである。

- パネル討論の基礎的な技能を活用して，いじめ問題を解決する方法を協力して見出す。

子どもたちは，前者の教科書単元で，パネル討論の仕方を習得した。その後，国語科活用学習「いじめ防止活動」において，これらの技能を活用して実際にどんなテーマで討論会をしたいかを考えた。すると，ある子どもから，「いじめについて話し合いたい」という意見が出された。今まさに社会問題になっている「いじめ」について，自分のクラスでもそのようなことがあり，身近な問題でもあるので，討論をするにふさわしいと全員一致でテーマが決まった。「いじめを防止する活動」としてどんなことを行えばよいかについて，全員でパネル討論を行った。４人のパネラーと２人の司会者は，いずれも立候補で決まった。いじめを防止する活動としてどんなことができるかについて，４つの代表的意見は「見て見ぬふりをしない」「不満がある人はすぐに身近な人に相談する」「みんなでたくさん楽しく遊ぶ」「見守り隊を作る」であった。身近な大切な話題であったためか全員が意見を述べて真剣に話し合った。

③ 道徳単元「人の喜び（悲しみ）は自分の喜び（悲しみ）とは，どういうこと？」

相手が喜んでくれたときの自分の気持ちや，相手が悲しんでいるときの自分の気持ちを考えさせ，いじめについて被害者の気持ちを想像させ，自分にできることとすべきことをクラス全員で話し合わせた。パネル討論では，いじめを防止するために何ができるかを話し合っているが，この道徳の時間

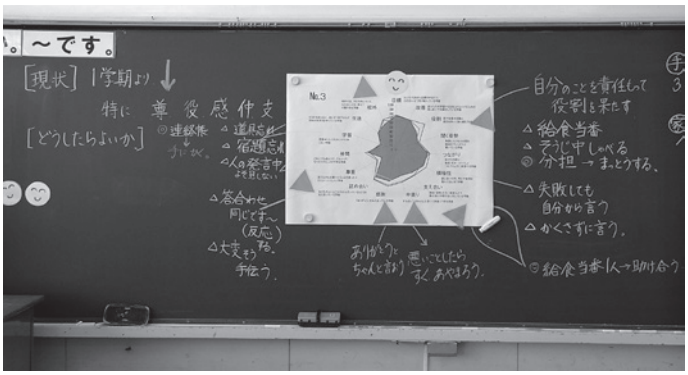


写真５　第３回スマイルタイムの足跡

を使って，なぜ防止しなければならないのかをいじめを受けた人の気持ちに焦点を当て，寄り添って考えるようにした。

④ 特別活動単元「スマイルタイム第３回目」

２学期が始まってすぐにいじめが発生したこともあり，１学期の林間学舎を終えて大きくなっていたレーダーチャートは，急にしぼんでしまった。この現状に戸惑いながら子ども達は学級をどう立て直していくか，スマイルタイムで話し合った（写真5）。スマイル・アクションとして，相談事を入れる箱「聞いて聞いてBOX」を作る，「忘れ物チェックカード」を作る，「いい所を見つける」といったことが決められた。

⑤ 国語科単元「資料を読んで考えたことを書こう」領域［書く］

この単元の目標は，次の通りである。

- 資料を生かして，自分の考えたことが伝わるように書く。

この学習では，「資料をもとに自分の考えが伝わるような文章を，興味を持って書こうとしている。」【関心・意欲・態度】や「資料から必要な情報を取り出している。」【書く能力】をふまえて，「自分の考えを伝えるために，資料から引用して，説得力のある文章を書く。」ことを目指した。しかし，子どもが本当に今書きたいことや伝えたいことを題材にする方がもっとこれらの力をつけることができるであろうと考え，この単元で習得した書く技能を活用させて，実際の生活場面で伝えたい内容について資料を活用して自分の考えを文章に書くことにした。それが，次の総合的な学習の時間単元「壁新聞づくり」である。

⑥ 総合的な学習の時間単元「壁新聞づくり」

この単元の目標は，次の通りである。

- 共同で壁新聞をつくることにより学級の連帯感を高め，トラブル解決策や取り組みの成果を発

信する力を育てる。

学級の取り組みを総合的な学習の時間に６種類の壁新聞にして学級外の人に発信していった。「真剣！ パネル討論」「スマイルタイム」「本当の友達新聞」「運動会」「音楽新聞　キズナ95」「いじめをなくすために－５の３の取り組み」という６つテーマに沿って各班で作成した新聞である。２学期の国語科学習⑤を受けての活用学習であることから，どの新聞にも「自分の考えを伝える」ために「資料を提示」することを条件にした。

そして最後に，互いの壁新聞について発表し合う「新聞発表意見交換会」を学級で行い，よりよい新聞に仕上げるためのアドバイスをし合って完成させた。グループごとに作成した壁新聞をポスター発表形式で発表し，聞き手はわかりにくいところを質問したり，よりよくするためのアドバイスをしたり，良いところを褒め合あったりした。前に出た発表グループを聞き手がアーチ状に囲んで椅子に座って聞き，質疑応答できるようにした。（写真６・７）

写真６　壁新聞の意見交換会

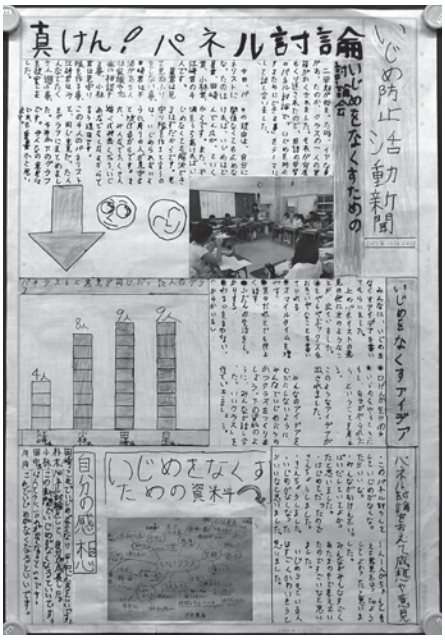


写真７　壁新聞「いじめ防止活動新聞」

⑦ 道徳「きずなって何？」

２学期の大きな行事である学年の音楽発表会を成功させた後，その練習過程と成果を振り返り，他学年からの感想なども紹介しながら，「きずな」について考えを述べ合った。

⑧ 国語科書写活用学習「元気になる言葉」

元気になる言葉をみんなに呼びかけることにより，いじめによって意気消沈した学級の雰囲気を盛り上げ，互いに支え合う気持ちを高めることを目標に行った。小筆を使って漢字とかなのバランスに気をつけて書く国語科書写の活用学習として，毛筆小筆で，一人ひとりが考えた「元気になる言葉」を短冊に書いて，廊下に掲示した。

⑨ 特別活動「お楽しみ会」

パネル討論でも出た意見「みんなでたくさん楽しく遊ぶ」に従って，いろいろな困難の中，運動会

や音楽発表会等，２学期の大きな行事をみんなで成功させたお祝いとして，子ども達の自主的な企画によるお楽しみ会をした。みんなで話し合いを重ねた結果，いじめが無くなったことをこの頃には誰もが実感していた。

⑩ 特別活動単元「スマイルタイム第４回目」

２学期末に第４回スマイルタイムを行った。写真８は，レーダーチャートを見てみんなで話し合った結果である。最も内側の線が第３回（２学期始め），その外側にある線が第２回（１学期末），そして外側の線が第４回（２学期末）である。

⑪ 特別活動「はがき新聞を書こう」

このような授業と並行して，２学期は次のような内容の「はがき新聞」を書いていった。

「お楽しみ会」，「よい２学期で終わるために」，「協力料理新聞」，「お楽しみ会」，第４回スマイルタイム後「２学期のまとめスマイル新聞」（図表６）

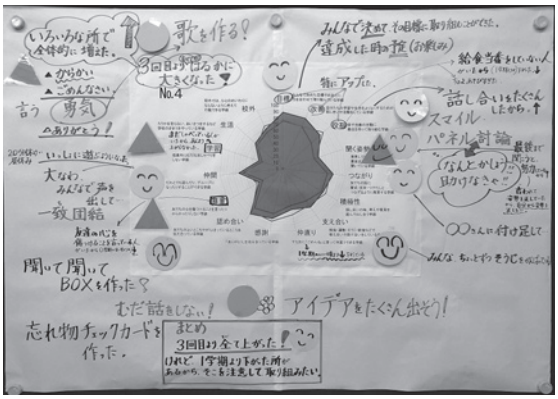
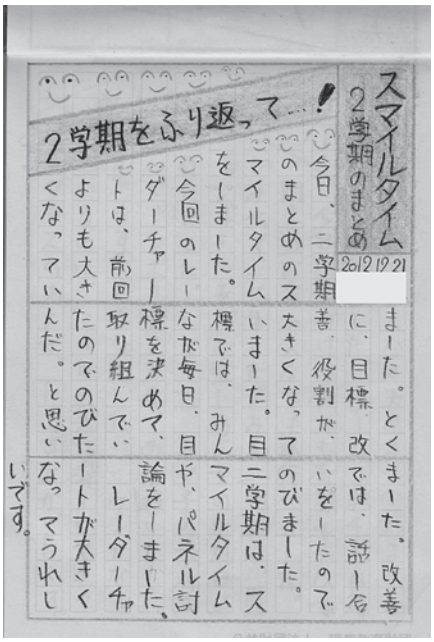


写真８　「第４回スマイルタイム」で子どもたちが出し合った診断結果



図表６　はがき新聞「２学期のまとめスマイル新聞」の例

(2) ２学期の授業についての考察

子どもたちは，国語科でのパネル討論に意欲的に取り組んだ。全員が机を口の字型に寄せ合って，真剣に話し合った。その中で，クラス全員が発言をしたことが印象的であった。中には，いじめを防止するためにスマイルタイムを増やした方がいいという意見が出された。それはなぜかと理由を聞かれてその子が答えたことは，「スマイルタイムを行うと，友だちのことがよくわかるからです。」ということであった。クラス全員で話し合うことのよさや価値を感じていることがうかがえる発言であった。パネル討論をして子ども達に話し合う自信がついてきたことがわかった。なぜなら，子ども達は，パネル討論の国語科の時間を楽しみに待つようになったからである。

また，２学期の総合的な学習の時間において，学級全員でパネル討論やスマイルタイムを通して話し合ったことをさらに壁新聞という形に残して学級外の人に発信したことは，自分たちの話し合いに価値を見いだすことにつながった。共同で新聞を作成することは，その過程に話し合いや教え合いや協力が必然的に生じる。従って，壁新聞を作ること自体によっても学級力が高まることがわかった。

国語科では，基礎的な話し合いの仕方を習得するだけではなく，国語科活用学習のための発展的な単元を設定して次の行動につなげる話し合いをさせたことが子ども達に話し合う意義を感じとらせることになった。このように，国語科での学習の成果を子どもの実態と生活に応じて活用させていく工夫をすることで，学習する意義が強く感じられ，子ども達が学級での問題解決に意欲的になることがわかった。スマイルタイムや討論会等の積み重ねにより，子ども達自らが学級の人間関係に関わる問題解決をした手応えが，子ども達に達成感をもたらしたといえる。

こうしてその後，学級で話し合った，いじめをなくす取り組みを全校に広げる試みとして，「低学年にもわかるように紙芝居や絵本を作る」「ポスターで呼びかける」「朝会や校内放送で呼びかける」「漫画で伝える」といったアイデアが出され，３学期に実現できるようグループで製作に取りかかることが決められた。

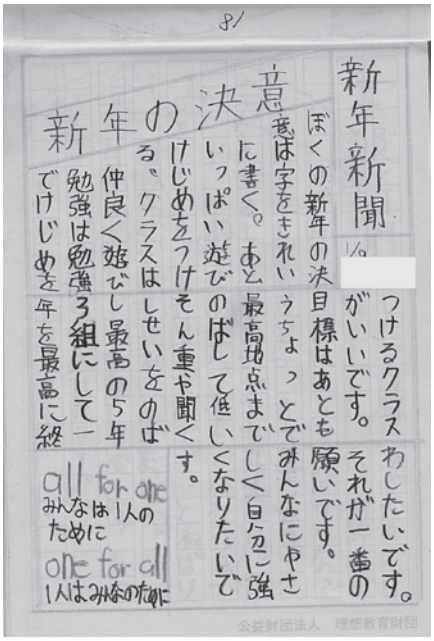
７．授業開発の実際　３学期の実践

３学期の授業についての報告を行う。

(1) 授業の実際

① 特別活動　はがき新聞「新年の決意」

３学期のスタートにあたって，心新たに新年の決意を書いた。（図表７）



図表７　はがき新聞「新年の決意」の例

② 特別活動単元「児童会行事フェスタ」

いじめをなくす取り組みを全校に広げるために，グループで，低学年にもわかるように絵本や紙芝居を創作して，児童会行事「フェスタ」でみんなに読み聞かせたり，いじめ新聞やポスターや漫画を作成して校内に掲示したりして，いじめ防止を全校に呼びかけた。また，この後，フェスタ成功の秘訣について学級会で話し合い，みんなの協力を讃え合った。

③ 総合的な学習の時間単元「わたしの成長」

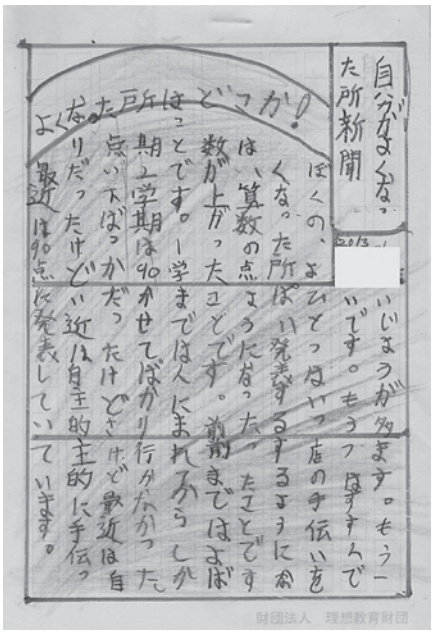
この単元の目標は，次の通りである。

• これまでの自分の成長を振り返り，将来の夢に向かって前進する希望を持つ。

自分の成長したことや自分が尊敬する人や偉人の生き方に触れ，将来の夢について，コンピュータのプレゼンテーションソフトを用いて，学習参観で保護者の前で一人一人がスピーチした。

④ 特別活動　はがき新聞「私の成長」

この１年間を振り返り，これまでの自分の成長をはがき新聞に書いた。（図表８）



図表８　はがき新聞「私の成長」の例

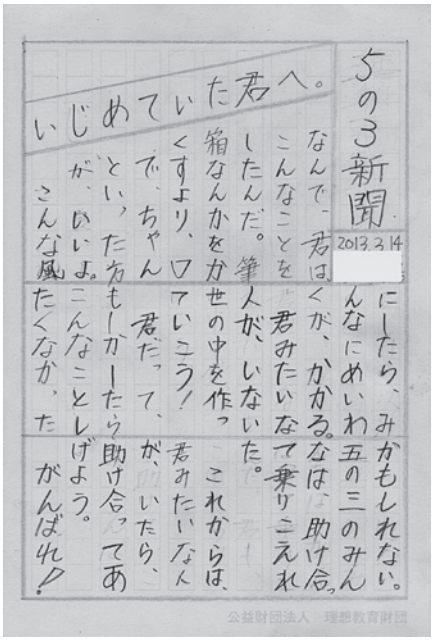
⑤ 特別活動単元「学級の歌づくり」

３学期の大きな行事「フェスタ」や「卒業生を送る会」を成功させた後，第４回スマイルタイム時にみんなで決めたスマイル・アクション「学級の歌づくり」に取りかかった。

クラスの歌の歌詞に入れたいフレーズを各自が書いてきて，グループで協議したものを全体の学級会で発表した。それを元に全体で質疑応答し，意見交換して歌詞として入れたい言葉を精選していき，歌を完成させていった。

⑥ 特別活動　はがき新聞「いじめていた君へ」

クラス一丸となった取り組みにより，２学期の時点でいじめ問題は克服したが，それを風化させないために３学期の終わりにはがき新聞に書いて掲示した。今後，もしいじめ問題に遭遇したらどう対応するのか，いじめられた人にどう寄り添えばよいか，そして，いじめる人に対してどう語りかければよいのかを考えさせ，お互いの考えを交換し合うことで，学級に，互いを守っているという安心感を生み出すことをめざした。（図表９）



図表９　はがき新聞「いじめていた君へ」の例

⑦ 道徳「大きい人・小さい人」

「大きい人，小さい人は，どんな人？」という問いに対し，それぞれが思いつくことを付箋紙に書いていき，グループで話し合って分類整理した後，クラス全体で協議する。全体で協議したことはカルタにまとめていった。

⑧ 総合的な学習の時間単元「壁新聞づくり」

自分たちで書きたいテーマを決め，グループで１枚ずつ壁新聞を作成した。内容は「フェスタ新聞」「新六年生新聞」「きずな新聞」「大きい人小さい人新聞」「成長発表新聞」「〇中夜間学校新聞」の６種類である。これらは学級力の最後の成果発表になった。この壁新聞はA4サイズに縮小カラーコピーして，はがき新聞と共に全員に思い出文集の一つとして手渡した。

⑨特別活動「1年間の思い出」

子ども達同士の認め合いを促すために，コンピュータ室で１年間の思い出になる写真のスライドショーをして，みんなの１年間の思い出を振り返り，それぞれのよさを語り合った。

⑩ 特別活動　はがき新聞「5年生を振り返って」最後のはがき新聞（感想総括型）

５年生のこのクラスの１年間を振り返って，クラスへの思いやみんなへのメッセージをはがき新聞に書いた。そして，これも思い出文集として全員のはがき新聞を印刷して手渡した。

⑪ 日常指導

年度末，「最後のレーダーチャートを見て」のはがき新聞を書いた。（これは有志が書いた。）

３学期に書いたはがき新聞の内容は，①「新年の決意」②「私の成長」③「いじめていた君へ」④「5年生を振り返って」⑤「最後のレーダーチャート」である。

(2) ３学期の授業についての考察

特別活動において，２学期から話し合ってきた「いじめ防止活動を全校に広める」ことを実現できたことで，子ども達に「自分たちの決意と実行に責任を持つ力」や「相手意識を持ってトラブル解決策を伝える力」が育った。

いじめ等の心配な出来事があったクラスだが，３学期の参観日に，校内に掲示されている壁新聞や「自分の成長」を発表する子ども達の姿を通して，保護者からは「いろいろなことがあったが，クラス一丸となって取り組んだことでこのように成長することができたのですね。感謝しています。お世話になりました。」という感想を頂くことができた。子ども達が，自分の成長は他者との関わりなくしてはなかったことに気づくことができたことも成果であった。

特別活動での学級の歌づくりでは，歌詞を決める段階で，かなり質問や意見が飛び交った。そのことで，学級への思いやみんなの考えをより深く理解し合えた。例えば，「なぜ四つ葉のクローバーなのですか？」「いじめを乗り越えた僕たちのクラスは，四つ葉のクローバーみたいに貴重な存在という意味があるからです。」とか，「なぜ夕日に向かってなのですか？」「夕日は日が暮れる最後の時です。その最後の最後まであきらめないという私たちの気持ちがあるからです。」などのやりとりをす

ることで，一つ一つの言葉の意味を深く考え，学級の団結力が高まった。つまり，話し合う事による練り合いが上達してきたと感じる。

特別活動におけるはがき新聞づくりにおいては，３学期は，新年への希望を抱かせてその目標を明確に持たせることと，１年間の自分の成長を自覚させ１年間の学級への思いをまとめることに重点を置いた。

それに加えて，２学期にあったいじめ問題を風化させないためにはがき新聞を書いて掲示した。具体的には，「今後もし，いじめ問題に遭遇したらどう対応するのか」「いじめられた人にどう寄り添えばよいか」「そして，いじめる人にどう語りかければよいのか」を考えさせ，お互いの考えを交換し合うことで学級に互いを守っているという安心感をもたらすことができた。

道徳では，これまでの経験から，大きい人，小さい人と思う人の行動の違いを具体的事例として共有できた。そして，こうありたいと思う人間像の参考にすることができたようだ。学級での行動にも関係することが多々あり，心地よいクラス作りのための一人一人の行動のあり方を省みる機会となった。思いつくことを一人一人カードに書かせたことで，具体的な事例を多く思い起こすことができた。

総合的な学習の時間においては，２学期から話し合ってきたいじめ対策のための学級での取り組みを「フェスタ」で全校に発信できる機会がいよいよやってきた，という感じで子ども達は意欲的に取り組んだ。例えば，これまでパネル討論や学級会で話し合ってきたことを生かしてグループごとに作成した絵本や紙芝居や漫画やポスターなどによっていじめ対策を呼びかけた。この頃になると司会や会場作りや受付，そして反省会まで，自分たちでどんどん協力して進めることができるようになっていた。最後の学習参観ではこの１年間の自分の成長をコンピュータのプレゼンテーションソフトを使って発表し，一人一人の自信を持った発表に保護者からは大変好評を得た。最後にこの１年間を振り返ってまとめた壁新聞には，子どもたち一人一人がいじめを乗り越えた学級の一員であることの誇りと満足感と次年度への期待が満ちていた。実際の学級の課題についてみんなで話し合い，課題解決に向けて考え，活動し，それを新聞に書き，振り返り，また次への活動につなげる，といったこの１年間の取り組みが，子ども達の思考力や判断力，表現力を伸ばし，さらにその一連の活動をすることで協力の成果が生まれ学級の絆が深まったといえる。壁新聞には，心に残る行事は勿論のこと，算数，図工，家庭，体育などの教科における自分たちの協力や成長などが具体的に示され，図や写真など資料を適切に配置して示すなど，学習の成果が表れていた。

このような取り組みを通して３学期には，授業にさらに集中する学級になっていた。グループで新聞を作ることにも，限られた時間ではあったがてきぱきと役割を分担し，各自が進んで取り組むようになっていた。記事の中には，算数や体育・図工・家庭などの教科でも見られた教え合いや協力，真剣な学びなど，学級としての育ちが具体的に表れていた。いじめを自分たちで乗り越え，フェスタ等の行事を協力して成功させ，学習にもみんなで集中して取り組めるようになった自分たちのクラスを尊いと思う子ども達の気持ちが随所に見られた。

このような子どもの変化が子ども達自身の言葉として表れたことは，付けたい力や目標に向かって

教科横断的なカリキュラムに基づく学級力向上プロジェクトを実施し，その過程で実際の学級改善を可視化して，絶えず子ども達に思考させ判断させ表現させる活動を連携していったことによると思われる。

８．学級力向上のために実施されたカリキュラムと基本型の考察

１学期当初に構想した教科横断的なカリキュラム・プランを，実践を通して具体化し，実際に１年間で実施したカリキュラムの全容を示すと以下の通りとなる。

【１学期】

（国 語 科）

- 「メモを使って題材をさがそう」……４月〈２時間〉
- 「ゲストティーチャーを推薦しよう」……５月〈２時間〉
- 「林間学舎の班長を推薦して決めよう」…６月〈１時間〉
- 「意見とその理由を聞き取ろう」……７月〈３時間〉

（特別活動）

- 「いいクラス」……４月〈１時間〉
- 「はがき新聞を書こう」……４月 ５年生になって頑張りたいこと〈１時間〉，５月 竹の子新聞〈20分〉，７月 スマイルの木の決意〈20分〉
- 「スマイルタイム」……５月〈１時間〉，７月（林間も終えてから。チャートNo. 2）〈１時間〉

（道　　徳）

- 「本当の友だち」……７月〈２時間〉

（総合的な学習の時間）

- 「めざせ！ 向上！ 学級力！」……７月〈２時間〉

【２学期】

（国 語 科）

- 「いじめ防止活動・学級討論会」……９月 討論のための意見を書き出すこととグループ討議〈１時間〉パネル討論10月〈４時間〉
- 書写「元気が出る言葉」……11月２日〈１時間〉

（特別活動）

- 「はがき新聞を書こう」……10月〈15分〉，11月 お楽しみ会〈15分〉，11月 よい２学期で終わるために〈15分〉，11月 初めてのお味噌汁作り〈15分〉，12月 お楽しみ会〈15分〉，12月 ス

マイルタイム〈1時間〉

- 「スマイルタイム」……9月（1学期の終わりのNo. 2を見ながらスマイルの木のカードを書いた）〈1時間〉，10月（No. 3）〈1時間〉，11月（よい2学期で終わるために）〈1時間〉，12月（No. 4）〈1時間〉

（道　　徳）

- 「きずなとは何？」……10月〈1時間〉
- 「人の喜び（悲しみ）は自分の喜び（悲しみ）とは，どういうことだろう？」…10月〈1時間〉

（総合的な学習の時間）

- 壁新聞づくり……10月 作成と意見交換会〈8時間〉
- 成長新聞づくり……12月〈3時間〉

【3学期】

（特別活動）

- 「スマイルタイム」……1月〈1時間〉，3月〈1時間〉
- はがき新聞「新年の決意」……1月〈20分〉
- はがき新聞「自分の成長を見つめて」…2月 成長新聞〈20分〉
- はがき新聞「いじめていた君へ」……3月〈1時間〉
- 「学級の歌づくり」……2月〈1時間〉，3月〈2時間〉
- 「1年間の思い出」（写真で振りかえるスライドショー）…3月〈30分〉
- はがき新聞「この1年間を振り返って」最後のはがき新聞…3月〈20分〉
- はがき新聞「最後のレーダーチャートを見て」…3月〈20分〉
- 「児童会行事フェスタ」への取り組み …1月（いじめ対策絵本及びいじめ対策紙芝居の作成）〈6時間〉，1月（終わって振り返って話し合い）〈1時間〉

（道　　徳）

- 「大きい人・小さい人」……3月〈1時間〉

（総合的な学習の時間）

- 壁新聞づくり……3月〈4時間〉
- 成長発表会　パワーポイントを使って…2月 作成と成長発表会参観〈2時間〉
- 偉人学習から個人の成長の認め合いへ…2月〈3時間〉

これを見てみると，当初構想していたカリキュラム・プランと大きく異なっているところが2点ある。一つめは，2学期に国語科での活用単元が追加され，学級力をテーマにした話し合い活動が実践過程で追加されていることである。これは，2学期当初に想定外のこととしていじめ事件が学級内で

発生したことへの対応であり，児童の発案で実施されたものであった。二つめは，総合的な学習の時間と特別活動にかけた時間の増加である。カリキュラム・プランでは構想していなかった壁新聞づくりと児童会行事が新たに追加されている。これらも児童からの発案により，いじめの解決と未然防止をねらいとして行われたものである。

逆に，道徳とはがき新聞づくりはほぼ計画通りに実施されている。

このことからわかることは，次の５点である。

① 国語科の教科書に規定された習得単元は，学級力向上プロジェクトを支える児童の言語に関する能力を育てるために必要となるものであり，カリキュラム・プランで構想した通りに実践することができる。

② 道徳の時間についても，学級力の向上に関連する道徳的価値を示す内容項目はすでに学習指導要領で定められているので，カリキュラム・プラン通りに実践することができる。ただし，学級力アンケートの結果や学級内での人間関係の状況に応じて，臨機応変に実践の過程で時間数を増やすことも可能である。

③ 国語科における活用単元（教科書教材の発展的な取扱い）については，子どもの意見や発案を生かしながら，学級の実態に応じて臨機応変に設定される。

④ 総合的な学習の時間と特別活動における児童主体の活動については，学級の実態に応じて，子どもの意見や発案を生かしながら，臨機応変に設定している。

⑤ 特別活動におけるスマイルタイムとはがき新聞については，カリキュラム・プランとほぼ同様に計画通りに実践することができる。

このことから，学級力を高めるための教科横断的なカリキュラム編成においては，計画カリキュラムと実践カリキュラムに大きな差異があることが明らかになった。しかしそれは，各学級の実態に応じて学級担任と子どもたちが協同して設定する臨機応変な活動（スマイル・アクション）が，学級力向上プロジェクトには必要不可欠であることを意味している。

したがって，小学校５年における学級力向上のための教科横断的なカリキュラムの基本型は先述した通り，関連づける教科・領域として，国語，特別活動，道徳，総合的な学習の時間を含み，およそ以下のような配当時間と活動内容が必要になることがわかった。

【国　　語】　書いたり話したり聞いたりする活動を通して，友だちのよさを認め合う（10 時間）

【特別活動】　はがき新聞を書いて学級力向上に関わる決意や責任を明らかにする（6 時間）
　　スマイルタイムを行う（6 時間）

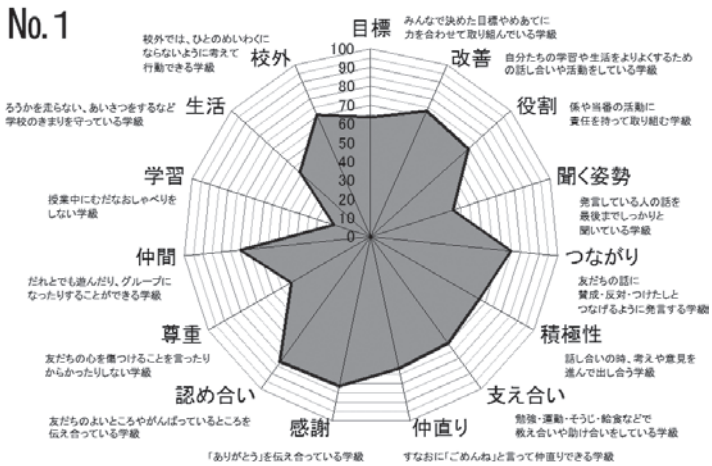
【道　　徳】　学級力に関わる学級道徳の価値や必要性に気づく（5 時間）

【総合的な学習の時間】　学級力向上の取り組みを行う（10 時間）

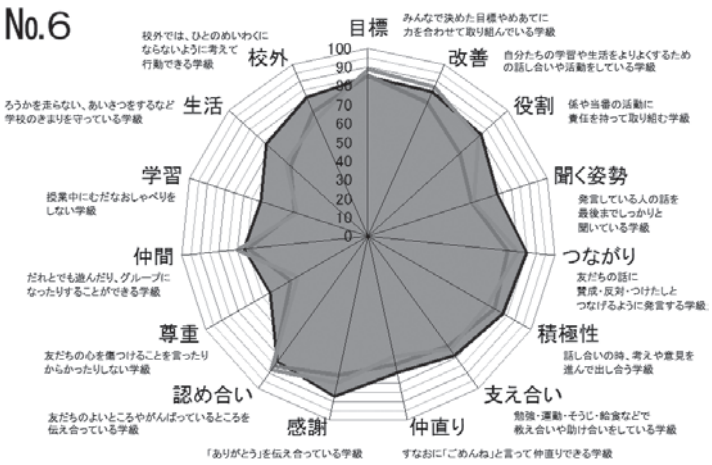
９．学級力レーダーチャートの形状変容とはがき新聞の記述に見られる授業の成果

本学級は，当初から「聞く」「学習」「尊重」に課題があり，その克服に重点を置いてきたが，なかなか向上しなかった。大きくなってもトラブルでまた小さくなるといった繰り返しであった。しかし，2学期のいじめ問題の解決に全力をあげて学級全員で様々な学習活動を継続して行ってきたことでようやく3学期になってその成果が表れてきた。

図表10と図表11を比較してわかることは，第1回目と比べて第6回目で大きく伸びた所は，「目標」「生活」「学習」「尊重」「聞く姿勢」である。それぞれの肯定率の数値上の変化は，「目標」（64％



図表10　第1回目学級力レーダーチャート



図表11　第6回目学級力向上レーダーチャート

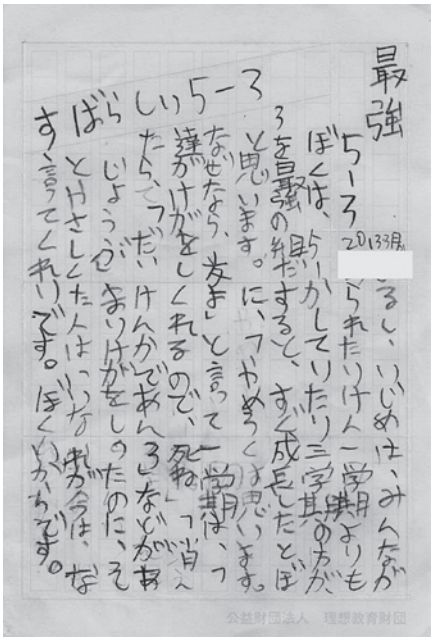
※図表11中の最も小さなチャートは第5回のもの，中間の大きさのチャートは第4回のもの，そして，最も大きなチャートは第6回のものを示している。

→ 85％）「生活」（51％→ 73％）「学習」（21％→ 60％）「尊重」（49％→ 60％）「聞く姿勢」（46％→ 72％）であった。

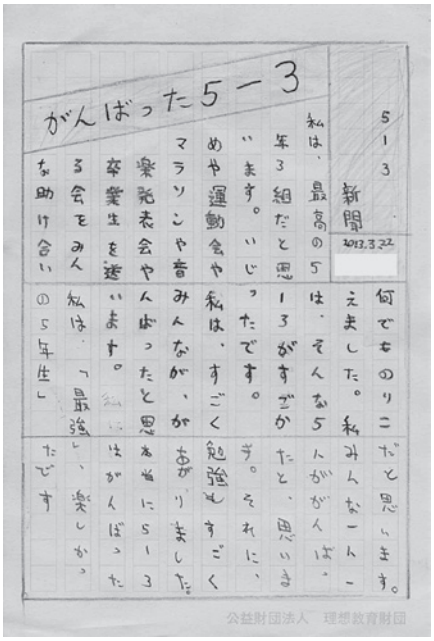
その理由は，３学期になると，スマイルタイムだけでなく，子ども達が自主的に毎日目標を立ててその成果を帰りの会で確認し合い，次の目標を決めるということが習慣になってきたからである。また，いじめ問題の克服を始めとして，数々の行事に全員で分担して協力して取り組み，その都度その成果をスマイルタイム等の学級会で振り返り，互いの頑張りを認め合うようになったからでもある。そうすることで子ども達に達成感が実感としてもたらされ，それがまた新たな行事に対しての意欲となり，新たな成果を生むといった好循環が生じてきたからである。５年生最後の算数科単元「割合」の学習でも初めは苦戦していたが，互いに教え合い，宿題も真面目にし，授業中も集中して学ぶようになったことで最後のテストでは全員が高得点をとったのである。彫刻刀を使う図工科の時間も，集中して彫り進める音だけが響く教室になっていた。互いを尊重して悪口を言わなくなったことは，子ども達のはがき新聞にも書かれている（最後のはがき新聞「５年生を振り返って」図表 12，図表 13，図表 14 参照）。

「いじめていた君へ」と題したはがき新聞の中には，「僕たちのクラスはみんな助け合って乗り越えられた。」「君だってこんなことしたくなかったのかもしれない。これからは君みたいな人がいたら，助けあってあげよう。」「私でよければ，相談にのります。いじめる前に話して下さい。」という言葉が書かれていた。

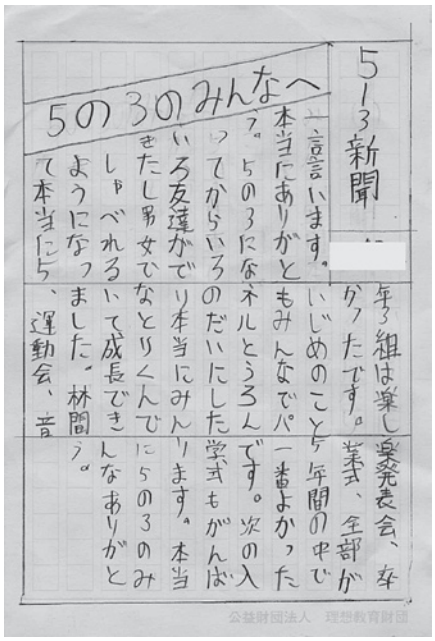
また，いじめの被害に遭っていた子は「恨んでいないから安心して下さい。でも違う人には被害を



図表 12　はがき新聞「５年生を振り返って」の例



図表 13　はがき新聞「５年生を振り返って」の例


5-3新聞

5の3のみんなへ

一言言います。本当にありがとう。5の3になれるとうれしいってからいろのだいにした学式もがんばいろ友達がでり本当にみんなります。本当きたし男女でなとりくんでにちの3のみしゃべれるいて成長できんなありがとようになっました。林間う。て本当にちゃ、運動会、音楽発表会、年3組は楽しかったです。いじめのこと5年間の中で一番よかった学式、全部が

図表 14　はがき新聞「5 年生を振り返って」の例

与えないで下さい。あなたが困っていたら自分もみんなもいつでも助けに行くからね。心配しないで下さい。」というメッセージを書いていた。学級全体が重苦しい雰囲気に包まれた出来事ではあったが，その解決のためにあらゆる機会を通じて教科横断的に取り組んだことで，このように互いを慈しむ気持ちが育ってきたことがこの新聞からうかがえる。

このクラスへの思いを書いたはがき新聞には，「最高のクラスだった。どんなときも協力したからどの行事も５年間で一番よかった。それに勉強もすごく上がった。みんなありがとう。いじめに負けなかった。このようなクラスがたくさんできたらいいなと思った。」などのような達成感あふれる言葉が並んでいる。また，被害に遭った子も含めみんなが「一生の思い出に残るとても楽しい1年間だった。」と書いていて，これらの言葉は，このクラスで共に過ごせた満足感とトラブルを乗り越えた安心感を表している。

10. 考察と今後の研究課題

では最後に，本実践研究で得られた知見を総括的に考察するとともに，今後の実践研究の課題を提示しておきたい。

(1) 総括的考察

まず，各学期の授業に関する考察を総括すると，学級力向上のための教科横断的なカリキュラム編成には一定の効果があることが確認できた。さらにこのことは，本論９節で検討したように，学級力

レーダーチャートの形状の変容が顕著であったことや，子どもが書いたはがき新聞の内容からも確認できる。

教科横断的なカリキュラム編成が提供する多様なスマイル・アクションが，学級力の諸項目を総合的に押し上げる効果があると推測される。つまり，単発の人間関係アクティビティーを複数実践するだけでなく，学級力の必要性を道徳の時間に意識化したり，国語科において学級力向上の取り組みについて提案したり，特別活動でスマイルタイムを実施して主体的な活動として学級力向上プロジェクトを意識化したり，さらには特別活動においてはがき新聞を書く活動を通して学級力向上のさらなる意識化を促したりすることが，学級力向上プロジェクトに含まれる活動の豊かさを保証し，ひいては学級力の実質的な向上につながっていくことがわかった。

さらに今回は高学年であることを意識して，学級力向上プロジェクトに含まれるスマイル・アクションとして，総合的な学習の時間での主体的な実践活動を３つ組み入れたことが効果的であった。具体的には，壁新聞の製作とそれを活用した他の学級へのいじめ防止アピール作戦と，学校行事と連動したいじめ防止自作絵本や紙芝居の上演会，さらに，自己成長をパワーポイントで保護者の前で発表する成長発表会である。これらの３つの主体的な実践活動を通して，子どもたちが，認め合いや協力，そして対話などにおいて積極的に取り組んだことが成果につながっている。

特に本学級のように，第１回目の学級力アンケートの結果に大きな課題が見られる場合には，こうした総合的な学習の時間における実践活動が有効であることがわかった。

次に検討したいのは，本論２節で予測した２つの課題についてである。

まず教師の主導性と児童の主体性の両立については，やはり教科横断的なカリキュラム編成を行うことを前提としている以上，通常の特別活動における人間関係ゲームや日常的なほめほめ活動，そしてクラス目標の設定とお祝いの会などがスマイル・アクションの中心的な活動となる場合と比較して，教師の主導性が強くなることは明らかであった。しかしながら，本学級の児童がその影響で主体性を低下させたかというとそうではない。逆に，国語科の討論会でも，道徳の話し合いでも，総合的な学習の時間での実践活動においても，子どもたちからの発案がありそれらに積極的に取り組んだ。それは，教師が大きな活動の指針を示した上で，具体的な活動の詳細については子どもたちの主体性を十分に認めたことや，学級力レーダーチャートで可視化された学級状況の課題について子どもたちにスマイルタイムでしっかりと危機意識を持たせることができたことで可能になったと推察される。これらは，学級力向上プロジェクトにおいて教科横断的なカリキュラム編成を行う際の指導上の留意点になるだろう。

もう一つの漸進的カリキュラム編成の必要性については，この１年間の実践の過程を追跡すると，およそ４割程度のスマイル・アクションが，年度当初のカリキュラム・プランに含まれていないもので，プロジェクトの進行過程で即時的に生み出されたものであった。

そのことは，実践研究におけるカリキュラム・プランの効果検証を困難にするものであるが，カリキュラム理論における区分を生かして，計画カリキュラムだけでなく，視点を変えて実践カリキュラ

ムの総体の効果検証をすることによって，教科横断的なカリキュラム編成の効果検証を行うことにした。

したがって，学級力向上のための教科横断的なカリキュラム・プランの骨格をなす基本型は，本研究で示したように，国語，特別活動，道徳，総合的な学の時間を組み合わせて，35 時間程度の大単元を構想することであるが，さらに各学級の実態や突発的な事象の発生に対応しながら，国語科の活用単元や特別活動での行事的活動，そして総合的な学習の時間における児童主体のスマイル・アクションを即時的に生成しながら実践していくことが必要であることが明らかになった。

学級力の向上という，R － PDCA サイクルを複数回実施する過程において，ある時点の学級状況が次の学級状況を生み出すもとになるような学習過程を研究対象とするときには，こうした実践カリキュラムの総体をとらえながら，その教育効果を検証することが大切であることがわかった。

(2) 今後の研究課題

今後の研究課題としては，次の３点があげられる。

まず１点目は，小学校５年生以外の学年でのカリキュラム・プランの開発である。それぞれの学年には，それぞれの教科等の内容が配列されているため，どの教科・領域の単元や内容項目が，学級力向上に効果があるのかを，授業開発と実践を通して明らかにする必要がある。全学年ではないにしても，少なくとも小学校低学年と中学年についてのカリキュラム・プランを示す必要がある。

次の課題として，道徳の単元開発をあげたい。2018 年に教科化される道徳は，学級力を高める上で，学級道徳のあり方とその必要性を深く意識化させる上で不可欠な学習内容となりうることが今回の授業開発を通して明らかとなった。学級力アンケートにある項目は，ほぼ全てが学級内の道徳規準，いわば学級道徳を示しているため，教師からそれを与えるのではなく，子どもたち自らが意識化し自己設定することがこれからの学級力向上プロジェクトでは必要な学習活動になってくる。その意味で，小学校のより多くの学年で学級力向上に効果的な道徳単元の開発を行う必要がある。

最後に３つ目の課題は，開発したカリキュラム・プランの効果を検証するときの実証的な規準や指標を明らかにすることである。学級力向上プロジェクトの実践事例が蓄積され，学級力レーダーチャートの大きさや形状によってある程度の学級の状況を客観的・統計的に数値評価で明らかにすることができれば，効果検証がより信頼性を持ってできるようになるからである。また，そうなれば，学級力レーダーチャートの形状や数値の指標を用いて，効果的なスマイル・アクションを，実践研究を通して明らかにすることが可能になるだろう。

【資料】

資料１　学級力アンケート（小学校高学年版）　出典：田中博之編著『学級力向上プロジェクト』金子書房，2013 年

【注】

１　はがき新聞は，公益財団法人理想教育財団が開発したコンパクトテキスト型表現ツールである。

【引用文献】

蛯谷みさ「小学４年生のはがき新聞」田中博之編著『学級力向上プロジェクト』金子書房，2013a 年，pp. 202–207
蛯谷みさ「低学年児童に合わせたはがき新聞の取り組み〈小学２年生の実践〉」田中博之編著『学級力向上プロジェクト 2』金子書房，2014 年，pp. 162–166
竹本晋也「サークルタイムにおける指導法の研究―教科学習・道徳・特別活動での活用法の比較分析を通して―」『早稲田大学大学院教職研究科紀要』第２号，2011 年，pp. 1–17
田中博之編著『学級力向上プロジェクト』金子書房，2013a 年
田中博之著『カリキュラム編成論』NHK 出版，2013b 年
田中博之編著『学級力向上プロジェクト 2』金子書房，2014 年
新潟大学附属新潟小学校著『「学級力」で変わる子どもと授業』明治図書出版，2010 年
新潟大学附属新潟小学校著『「学級力」を鍛え，授業で発揮させる』明治図書出版，2012 年
彦田泰輔「はがき（壁）新聞で身につく R-PDCA サイクル実践力〈中学３年生の実践〉」田中博之編著『学級力向上プロジェクト 2』金子書房，2014 年，pp. 167–172
森嵜章代「5 年生の実践」田中博之編著『学級力向上プロジェクト』金子書房，2013 年，pp. 39–47

【資料 1】

ver.2.0

学級力アンケート

第　　回（　　月）

年　　組　　番

名前

◎　このアンケートは、私たちの学級をよりよくするためにみんなが意見を出し合うものです。それぞれの項目の４～１の数字のあてはまるところに、一つずつ〇をつけましょう。

４：とてもあてはまる　３：少しあてはまる　２：あまりあてはまらない　１：まったくあてはまらない

目標をやりとげる力

①目標	みんなで決めた目標やめあてに力を合わせてとりくんでいる学級です。	４－３－２－１
②改善	自分たちの学習や生活をよくするための話し合いや活動をしている学級です。	４－３－２－１
③役割	係や当番の活動に責任を持ってとりくむ学級です。	４－３－２－１

話をつなげる力

④聞く姿勢	発言している人の話を最後までしっかりと聞いている学級です。	４－３－２－１
⑤つながり	友だちの話に賛成・反対・つけたしと、つなげるように発言している学級です。	４－３－２－１
⑥積極性	話し合いの時、考えや意見を進んで出し合う学級です。	４－３－２－１

友だちを支える力

⑦支え合い	勉強・運動・そうじ・給食などで、教え合いや助け合いをしている学級です。	４－３－２－１
⑧仲直り	すなおに「ごめんね」と言って、仲直りができる学級です。	４－３－２－１
⑨感謝	「ありがとう」を伝え合っている学級です。	４－３－２－１

安心を生む力

⑩認め合い	友だちのよいところやがんばっているところを伝え合っている学級です。	４－３－２－１
⑪尊重	友だちの心を傷つけることを言ったり、からかったりしない学級です。	４－３－２－１
⑫仲間	だれとでも遊んだり、グループになったりすることができる学級です。	４－３－２－１

きまりを守る力

⑬学習	授業中にむだなおしゃべりをしない学級です。	４－３－２－１
⑭生活	ろうかを走らない、あいさつをするなど、学校のきまりを守っている学級です。	４－３－２－１
⑮校外	校外ではひとのめいわくにならないように考えて行動できる学級です。	４－３－２－１